AP/FD NEWS LETTER

横浜国立大学
高大接続・全学教育推進センター

2020.3
Vol.13

CONTENTS

P1　巻頭言　大学生の文章能力を疑う？
高大接続・全学教育推進センター　副センター長／教育開発・学修支援部門長　松本　真哉

P2　学生の「主体的な学び」を促進するアクティブラーニングとは 2
高大接続・全学教育推進センター　安野　舞子

P8　ポートフォリオを学生の主体的な学びに繋げるために
大学院教育強化推進センター／高大接続・全学教育推進センター　市村　光之

P10　CENTER NEWS

大学生の文章能力を疑う？

高大接続・全学教育推進センター　副センター長／教育開発・学修支援部門長　松本 真哉

本センターの教育開発・学修支援部門の部門長を兼務しほぼ4年が経過しました。この間、授業アンケートのweb化や内容検討、リテラシー科目の導入、四大学FDフォーラムの企画推進、授業アンケート結果に基づく自己点検票の改訂などに取組んできました。これらの取組については、本学の教育に関わる皆様にいろいろとご協力を頂き現在に至っています。誠に有難うございます。このような全学課題に関する検討事項に加え、自身が担当する講義や実験、研究室での学部生や院生の指導でも、学生の教育に関して考えることが最近増えています。今回の巻頭言では、最近少し気になっている点についてご紹介したいと思います。それは、学生の文章読解力と作成力です。

私たち大学教員は、大学に入った学生は、この程度の基礎学力とそれに付随する能力を身に付けている、という前提で、講義や実験などの内容と指導方法を考えていると思います。中等教育課程の学習指導要領改訂などで、その前提は少しずつ変化していますが、最近は、学習してきた内容だけでなく、何か基本的な能力が変化しているのではないか、という気持ちを抱きつつあります。この点について思量する中で、文章の論理的読解力及び文章構成を考える能力が変化しているのではないか、と疑問を持つようになりました。ただ過去の自分を振り返ると、学生時代に自分の書いた文章が先生の添削で真っ赤になった経験がありますので、今も昔も大学生の文章能力には差がない、という可能性もあります。しかし、大学に奉職して十数年が経過しますが、論文などの情報の読み取りや文章作成に関する学生への指導結果の反映の様子を見ると、以前に比べて徐々に良くない方向に変化が生じているように感じています。

私を含めた多くの教員の皆さんは、自分やその周辺の状況がこうだったから、今の学生もその前提で概ね大丈夫だろう、と考え、講義などの諸条件を設定していると思います。しかし、その前提に大きな変化が生じている可能性があるかも知れません。例えば、教科書を指定すれば、最低限その教科書内容は理解できる、という事はごく当然のことのように思います。本学の学生であれば大丈夫、問題ない、と思う反面、不安に思う経験がないわけではありません。担当講義で学生から届く声の中に“この内容はどうやって勉強すれば良いでしょうか？”という質問があります。これまでは“教科書のここととここをよく読んで学習して下さい”という返答が私の定形でした。しかし今は、その返答の前に、教科書に書かれている文章を正確に読み取れているか、という確認をすることも必要かも知れないと思い始めています。文章作成については、主に卒業論文などの執筆時ですが、これまでとは違う指導の仕方を考える必要を感じつつあります。今回ご紹介した内容について少しでも思い当たるご経験のある方は、受講生の文章能力の確認などを教育活動の一部に取り入れて頂くことが、授業等の理解度向上に資する可能性があるかも知れません。

話題が随分と個人的な課題に偏重してしまいましたが、引き続き、本学での学生の教育指導、教育開発・学修支援部門の活動へのご協力など、どうかよろしくお願い致します。

学生の「主体的な学び」を促進する アクティブラーニングとは 2

高大接続・全学教育推進センター　安野　舞子

はじめに

１年前に発行した本ニュースレター（Vol.11）において、筆者は「学生の『主体的な学び』を促進するアクティブラーニングとは」とのタイトルで、学内の先生方から伺った意見を基にアクティブラーニング（以下、AL。）を授業に取り入れる上での課題について整理した上で、“単なるアクティブな活動”を超えた深い学びを促すALについて書かせていただきました。その際、本学のみならず全国的に伸び悩む、学生の授業外学修時間のことにも触れ、闇雲に課題量を増やすのではなく、「内化→外化→内化」のプロセスを考慮した授業設計をすることで自然と授業外学修時間が増える方法であり、かつ、AL型授業の一形態である「反転授業」についてご紹介させていただきました。

一方で、昨年度（2018年度）秋学期に行った「教員アンケート」（「授業アンケート結果に基づく自己点検票」作成時に行ったものです）で、「授業外学修時間を期待通り確保するための工夫」について尋ねたところ、最も多い回答は「課題を出す」でした。そこで、本稿では再び、単に課題量を増やすのではなく、学生の学習意欲を引き出し、主体的な学びが促された結果、学修時間も自然と延びていくようなALのあり方について模索していきます。中でも今回は、大人数クラスにおける参加型授業の工夫について言及したいと思います。なお、そうしたALの工夫についてご紹介する前に、上述した2018年度秋学期の教員アンケートの結果、および2019年度春学期に実施した教員アンケートで行ったAL型授業についての実態把握調査の結果についてもご報告させていただきます。

教員アンケートに見る授業外学修時間を増やす工夫の現状

2018年度秋学期の自己点検票作成時に実施した教員アンケートでは、「授業設計と成績評価に関連するアンケート」と題して、「授業アンケート結果に表われた授業外学修時間は、シラバスの『授業時間外の学修内容』欄に示した事前・事後学修の内容が反映されていましたか。」とお尋ねしました。その結果、回答科目（n=484）の約7割が「シラバスで示した内容がほぼ反映されていた（期待通りの授業外学修時間だった）」と答えていました。なお、そのように回答した科目の、授業アンケート結果に表れていた授業外学修時間の平均値は1.77であり、この値は１コマあたり平均１時間弱ということになります（授業アンケートでの授業外学修時間を尋ねる設問の選択肢は1：0～30分、2：１時間程度、3：2時間程度、4：3時間以上）。この回答群に、「授業外学修時間を期待通り確保するための工夫」について尋ねたところ、その回答の7割近くが「課題を出した」もしくは「小テストを実施した」でした。一方、「シラバスで示した内容からすると、授業外学修時間は少なかった」と回答した約3割の科目の１コマあたりの平均値も1.76とほぼ同じ値でしたが、「授業外学修時間が期待より少なかった要因は何か」との問いに対する最も多い回答は「課題量が少なかった」でした。このように、多くの先生方にとって、学生に期待する１コマあたりの授業外学修時間は１時間程度であり、課題を出す（増やす）ことでこの時間が確保できるとお考えになっている傾向があることが分かりました。確かに、課題量を増やせば授業外学修時間は増えますが、学生が意欲的・主体的に取り組んでこそ深い学びとなることを考えますと、“課題量を増やすことを超えた”授業の工夫が必要です。そこでALが脚光を浴びている訳ですが、本ニュースレターVol.11で「ALを授業に取り入れる上での課題」について言及したように、先生方お一人お一人の中でALに対する思い、捉え方は様々かと思います。しかし、そのような中でも、大人数クラスにおいて、いかに学生たちに意欲的・能動的に学んでもらうかは、多くの先生方に共通するお悩みだと思いますので、次節で本学の開講科目におけるAL型授業の取組状況についての最新データをお示しした上で、大人数クラスにおける参加型授業の工夫についてご紹介したいと思います。

教員アンケートに見るAL型授業の取組状況

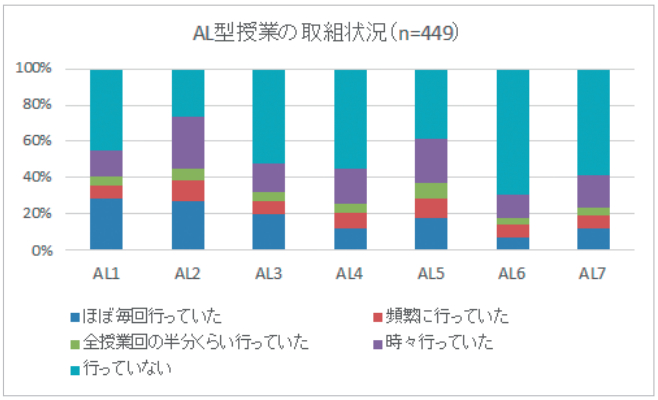
2019年度春学期の自己点検票作成時に実施した教員ア

ンケートでは、「当該科目では、以下のことを行っていましたか。」との設問で、ALの活動形態として代表的な7つの方法について尋ねました：

AL1：学生がコメントや質問を書き提出する（コメントシート、大福帳など）
AL2：教員・学生間で質疑応答やディスカッションをする
AL3：学生同士でディスカッションやディベート、グループワークを行う
AL4：学生が自分の考えや研究課題などを発表する
AL5：教員や学生が課題を設定し、解決する
AL6：調査学習、実習、フィールドワークなどで体験的に学ぶ
AL7：授業の予習として文献を読んだり動画を観て、学んだ内容をノートにまとめたり課題を解く

図1はその回答結果をグラフにまとめたものですが、「教員・学生間で質疑応答やディスカッションをする（AL2）」ことが最も多く取組まれており、体験学習（AL6）を除いて全体的に比較的取組みが少ないと思われる活動は「学生が自分の考えや研究課題などを発表する（AL4）」や「授業の予習として文献を読んだり動画を観て、学んだ内容をノートにまとめたり課題を解く（AL7）」でした。

図1



なお、AL7は先述の「反転授業」を想定した項目です。「反転授業」にはあまり馴染みのない先生方が多くいらっしゃると思いますので予想できる結果ですが、AL4の「学生の発表」については、少人数のクラスでこそ実施されやすい活動であり、本アンケートに回答した科目は中規模以上のクラスが8割以上を占めているため、このような結果になったものと思われます。図2はAL4、図3はAL7の回答結果を受講者人数区分別に示したものです。

図2

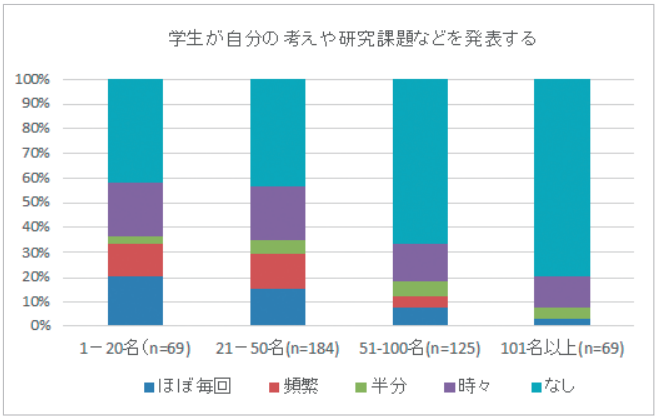
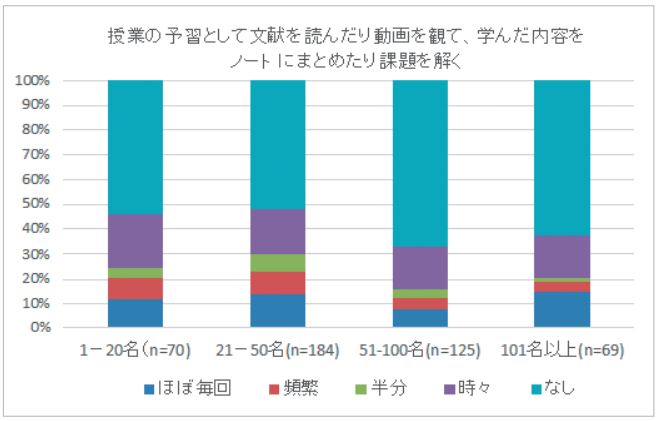
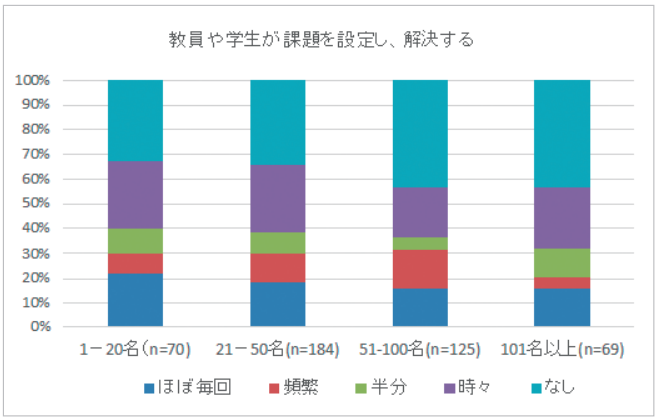


図3



「教員や学生が課題を設定し、解決する（AL5）」活動は、レポートでそのような取組みが行われることもあると思いますが、AL型授業として有名ないわゆるPBL（Problem Based Learning　問題解決型学習/Project Based Learning 課題解決型学習）もこの活動に該当します。図4の受講者人数区分別グラフを見ると、中規模以上のクラスにおいても、この活動がある程度取り入れられていることが見受けられます（ただし、これがPBLなのかどうかは、以下で議論します）。

図4



ここで、大人数クラスにフォーカスして回答結果を見てみたいと思います。図５は「教員・学生間で質疑応答やディスカッションをする（AL2)」、図６は「学生同士でディスカッションやディベート、グループワークを行う（AL3)」を受講者人数区分別に示したグラフですが、教員・学生間でのやり取りは、101名以上のクラスでも比較的多く取り入れられています（「ほぼ毎回行っていた」から「時々行っていた」まで含めると約６割)。一方、学生同士のディスカッションやグループワーク等は101名以上のクラスで行われているのは２割に満たず、51-100名規模のクラスにおいても６割以上の科目では行われていません。

図５

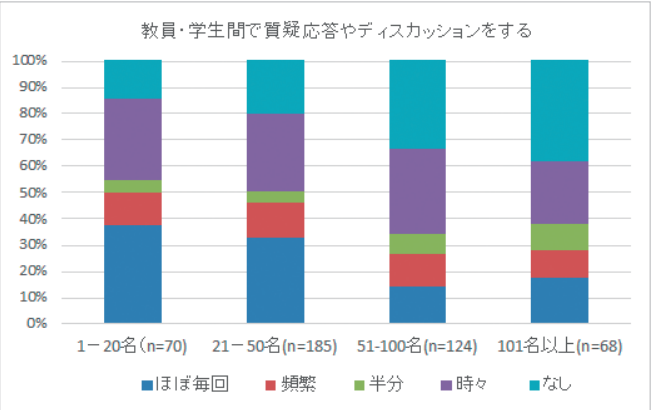
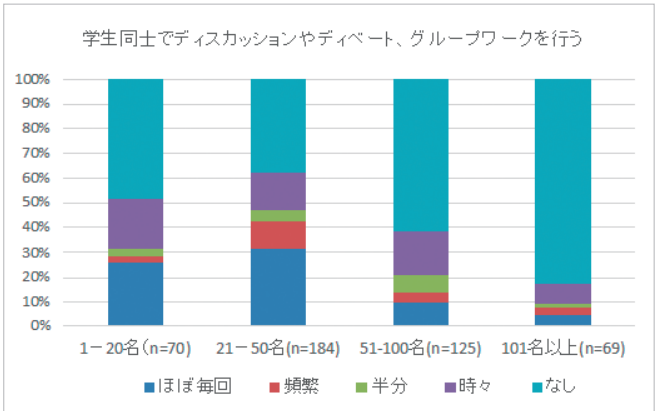


図６



この結果を見ますと、「教員や学生が課題を設定し、解決する（AL5)」(図４） はAL型授業として有名なPBLも該当し、「中規模以上のクラスにおいてもかなり多く取り入れられていると見受けられる」と先述しましたが、特に大規模クラスにおいては、学生たちがグループで取組む形態のPBLではないのかも知れません。実際、AL3とAL5について101名以上のクラスについてクロス集計したところ、学生同士のディスカッションやグループワーク等は全く行なっていないものの（AL3)、課題設定・解決の活動をしている（AL5）という科目がほとんどでした。

大人数クラスの授業でも、もっと学生同士が交わり合い、能動的な授業が展開でき、かつ、より深い学びに繋がるような工夫はできないでしょうか----。そこで以下、大人数クラスにおける参加型授業の可能性について探っていきたいと思います。

大人数クラスにおける参加型授業の工夫

１）授業支援システムのアンケート機能を活用してみる

先ずは、教員・学生間の質疑応答やディスカッション、学生同士の話し合いの場を活性化させる手法の一つとして、授業支援システムのアンケート機能を利用した、授業内でのアンケート実施をご提案いたします。毎学期、先生方には授業支援システムを使って授業アンケートを実施していただいていますが、まさにそのアンケート機能を授業で活用する、ということです。同システムでアンケートを実施すると、即座に回答が集計されグラフ表示されますので、授業で取り扱う事項について学生に質問し、アンケートに答えさせ、回答結果をスクリーンに出しながらその結果について全体でディスカッションしたり、先ず小グループで学生に議論させてから全体で意見を発表させる等、アンケート結果を利用して学生参加型の授業が展開できます。これまで講義で説明した内容を学生がどれだけ理解できているか、その場で確認できるというメリットもあります。以下の写真は、筆者が担当する全学教育科目の授業でアンケートを実施した時の様子ですが（学生が回答している姿の写真がないので残念なのですが・・・)、140名以上の学生が一生懸命アンケートに答え、回答結果に対する解説の話を真剣に聞いていました。また、この回答結果に対してのコメントを求めたとろ、数名の学生から手が挙がりました。

写真

大人数クラスの授業といえば、私語、居眠り、スマホいじり、内職の横行が多くの教員にとっての悩みの種だと思いますが、こうしたアンケートの時間を講義の合間、合間に入れていくと、多くの学生は講義に集中します。この日の授業後に書いてもらった振り返りシートには、授業中のアンケート結果を踏まえながら考察しているコメントが散見されたのは言うまでもありません。

2）「大教室での参加型授業の工夫８か条」

参加型の場づくりの技法であるファシリテーションの講師として著名であり、そのファシリテーションを大学教育に活かすために様々な提案と取組みを行なっている東京工業大学教授の中野民夫氏は、「大教室での参加型授業の工夫８か条」を提唱しています。筆者は2020年１月下旬に早稲田大学で行われたFDセミナーに参加し、そのセミナー講師であった中野氏のレクチャーを受けましたが、この８か条は非常に参考になると思いました。そこで、この８か条について、中野氏の著書『学び合う場のつくり方』（岩波書店、2017）をベースに、以下、ご紹介させていただきます。

まず、「大教室での参加型授業の工夫８か条」とは次の通りです：

1. 教室の席は扉でくじを引き、少人数のグループ作る。
2. オリエン後チェックインから始めます。横に坐る子どんな人？
3. 専門の勉強以前に「人生」に、焦点あてて生きる意欲を。
4. 学生の中にいるいるやってる子、スピーチ頼めば皆釘付け。
5. ひとしきり話を聴いたらグループで、気づきや発見話し合う。
6. 全体で質疑応答シェアリング、決してあてずにじっと待つ。
7. 出席は100%今ここに、私語スマホ読書居眠りありえません。
8. 最後にはフィードバック集めます。きっちり読んで次につなごう。

この８か条は、一寸読むと「そんなことは無理」、「え？そこまでやるの？」と思われる方もいらっしゃるかも知れませんが、その一つ一つの工夫の意味を理解すると、そのどれもが合点がいくことが分かります。

まず１番目の「教室の席は扉でくじを引き、少人数のグループ作る。」ですが、くじを準備すること、授業開始前に扉でくじを引かせることにそもそも難しさや抵抗を感じられる先生が多いかも知れません。このくじを引き、少人数のグループを作る目的ですが、これは「座り方の工夫（場づくり）」を意図しています。大教室では後ろから席が埋まり、前はガラガラです。また、後ろの方はいつも仲間同士で座る学生が多く、これでは常に気が緩んだり、私語も出ます。そこで、大教室であっても「くじ」を引き、ある意味での「指定席」にして、偶然隣合わせた人とグループになってもらうことで、初対面からくる適度な緊張感を醸し出します。また、これは筆者がよく経験することとして、大教室で隣同士もしくは近隣の者同士で話をさせると、必ず一人でポツンと座っている学生、話し合いに参加しない学生が散見されます。ですので、こうしてあらかじめ小グループで席を作ることは、大教室での能動的な学びを促す基盤になるかと思います。なお、大教室のほとんどは黒板に向かってぎっしり詰められた固定席が多いと思いますが、くじを使った「指定席」の作り方については、本稿の最後に例を掲載しています。

２番目の「チェックイン」とは、授業の冒頭の時間（オリエンテーション）に、グループ毎に自己紹介をしたり「今の感じ（身体や心の状態）」をシェアすることを意味しています。そうすることで、グループメンバーに対する緊張感が解れ、その場への参加意識が高まります。

続いて、３番目の「専門の勉強以前に『人生』に、焦点あてて生きる意欲を。」ですが、ここでは、大学で専門分野の学問を学ぶ以前に「いったい何のために勉強するのか？」という根本的な問いがあまり問われていないのではないか、という著者の疑問提起が含まれています。確かに、１年生の必修科目（英語の授業）を担当している筆者自身も、授業の中で学生と会話する中で、「まずは受験勉強を必死にやって大学に合格することが目前のゴールであり、入学してから将来のことを考える」という学生が少なくないように感じています。よって、専門分野の話しをしつつも、例えば、担当教員やゲストスピーカーの「ライフストーリー」の語りを時に織り交ぜながら、「何のために学ぶのか」、「この授業での学びが自分の人生にどう繋がるのか」、学生の関心を喚起させる工夫が、ここで提案されているのです。

次に、４番目の「学生の中にいるいるやってる子、スピーチ頼めば皆釘付け。」ですが、これは、受講生の中には大学内外で様々な経験をし、授業の内容に関連づけた話をさせると物凄いプレゼンが出来る学生は必ずいるはずだ、という著者の実体験からきています。今まで同じ教室に座っていた学生が、皆の前に立って凄い話をし始めることほど周囲の学生が興味関心を持ち、話に集中することはない、と著者は言います。このような学生をどのように発見するかは、８番目の「最後にはフィードバック集めます。きっちり読んで次につなごう。」にあるように、毎回授業の最後に気づいたこと・学んだこと等をフィードバックシートに書いてもらうことで、その中から教員が探し出すことができます。

続いて、５番目の「ひとしきり話を聴いたらグループで、気づきや発見話し合う。」と６番目の「全体で質疑応答シェアリング、決してあてずにじっと待つ。」ですが、実はここにこそ、グループワークや全体の場での発表を活性化させるコツが秘められています。まず、グループで話し合いをさせるタイミングですが、人間の集中力を考え、講義開始後20～30分で一旦止めて問いかけをします。例えば「今までの話で印象的だった点はなんですか？何を感じたり考えたりしましたか？」というように。そして、隣の人や小グループで話をしてもらいます。これをすることで、学生たちは眠っていられなくなりますし、同じ話を聞いていても捉え方や解釈が異なったり、自分とは違うところに相手が強く印象を持っていたりすることもありますので、お互いに刺激し合って対話が活性化し、ひいてはクラス全体が活性化してきます。この後、全体で質疑応答を挟むこともできます。「どんな話をしていましたか？グループで話していたことでも、そうでないことでもいいので、少し全体に分かち合ってください」と発言を誘います。一通りの講義の後、いきなり質問して挙手を求めてもなかなか手は挙がりませんが、小グループで話をすることで自分の頭の中で整理がなされ、より発言しやすくなります。

このように、講義を一方的に聴くだけだとすぐに忘れやすいものも、仲間との対話を通し自分の言葉で相手に伝えることで理解が定着し、また他者からの情報による新たな発見があり、学びが深まります。また、こうした時間を一度でなく、講義中に何回か挟み込むことを習慣づけることで、学生たちを「この授業では眠っていられない。スマホで遊ぶ暇がない。内職している場合ではない。」という気にさせることができるかも知れません。なお、この一旦休止の時に、前項の授業支援システムを使ったアンケートを実施することも一つの手です。

７番目の「出席は100%今ここに、私語スマホ読書居眠りありえません。」については、著者・中野氏の人生観が滲み出ています。氏は大勢の学生を前に次のように語ります。「人生は選択の連続だから、もしこの授業を取って今日ここに来たのなら、今ここでしたかできないことを100％やろうよ。いつもここではないどこかに気を取られていると、ずっとそういう人生になってしまうよ。もしつまらないと思ったり、眠りたいとか他にやりたいことがあるのなら、教室を出てそのことをちゃんとやって」と。まさに、「今、ここに生き、ここで学ぶ」という人生観です。私語は周りの迷惑になる為、注意する先生方も多いと思いますが、居眠りやスマホいじり、内職については、周りに迷惑をかけないので特に注意しない、という先生方が多いのではないでしょうか。しかし、ことグループワークをさせることを考えますと、講義に集中してもらわなければ成り立ちませんので、「出席は100％今ここに」は大前提となります。このように、「人生の姿勢」でもあり、グループワークを真に意味あるものにさせるためにも「今ここでしかできないことを100％やろう」というメッセージを講義で学生に伝えていくことが大事になってきます。

最後の８番目「最後にはフィードバック集めます。きっちり読んで次につなごう。」は、先述したように、毎回授業の最後に気づいたこと・学んだこと等の感想を書いてもらうことですが、数百人のコメントを読むのはかなり大変だと思います。しかし、筆者も経験していることですが、すべてのコメントに目を通した後、次の授業の冒頭に「前回のコメントシートから」の時間を取り、前の授業を振り返ることで「他の学生がそんなことを考えていたなんて、新たな発見でした」、「自分とは違う他者の意見に考えさせられました」といった声が学生から必ず寄せられますので、この「フィードバックを集め次につなぐ」活動は非常に重要だと考えます。

３）大人数クラスにおける参加型授業はどれだけ“効く”のか？

以上、中野民生氏の「大教室での参加型授業の工夫８か条」をご紹介しましたが、「参加型授業」は学生の学びにどれだけ“効く”のでしょうか。中野氏は、こうした授業の学生にとっての意義として、次の4点を挙げています：

- 「学ぶ楽しさ」：講義を聴くだけでなく、学生同士で話し合いながら学ぶのは楽しい
- 「世界の広がり」：他者の多様な意見や価値観に触れられて自分の世界が広がる
- 「コミュニケーション力の向上」：毎回の対話の積み重ねで、コミュニケーション力がつく
- 「主体性の発現」：話し合いの中で刺激され、自分でも何かやりたくなってくる

これらは、学生同士の横のつながりがもたらす相互作用の賜物であり、学習意欲や主体性の向上に参加型授業は貢献している、と中野氏は述べています。そして実際に、ある授業（「NPO・NGO論」）の初回、中間期、最終回の3回にわたりアンケート調査を実施し、こうした意識や行動の変化について検証していますが、学びに対する意識やコミュニケーション力（「話すこと」と「聴くこと」両方）に大きな向上が見られたと述べています。ただし、主体性の発現（何かをやりたくなった）は見られても、実際の行動（刺激を受けて、実際に何かを始めた）についてはたどり着いていない、とのことでした（中野氏の言う「行動」とは、授業のテーマであるNPOやNGOを「作る」ということです）。この点については、たとえ意識が変化しても、行動に移すまでには一度だけでは難しく積み重ねが必要であり、長期的なプログラム

（カリキュラム）や小グループでまた会うといったフォローアップの必要性を指摘しています。

おわりに

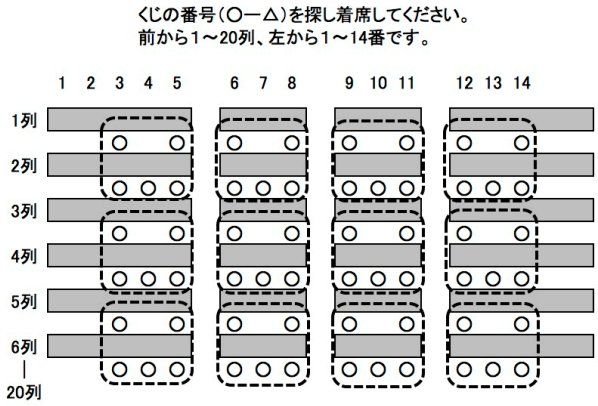
本稿では、まず初めに２つの教員アンケート（授業外学修時間およびAL型授業の実態に関する調査）の結果をご紹介し、課題量を増やす以外で学生たちが意欲的・能動的に学修し、その結果、自然と授業外学修時間が増えるようなAL型授業のあり方について模索することをご提案しました。そして、特に大人数クラスにおいて、いかに学生たちに意欲的・能動的に学んでもらうかが多くの先生方に共通するお悩みであろう、とのことで、「大人数クラスにおける参加型授業の工夫」として、授業支援システムのアンケート機能を活用すること、そして「大教室での参加型授業の工夫8か条」をご紹介させていただきました。参加型授業の8か条については、すべての項目を、しかも毎回の授業で、取り入れていただく必要はもちろんございません。先ずは、「これなら取り入れられそうかな」と思われるものを少しずつ実践していただけるだけでも手応えを感じられるかと思います。

すべての授業においてALを取り入れる必要はないかも知れません。ただ、ここまでインターネットが発達した時代であり、世界中の著名な教授の講義がネット配信されているような高等教育現場において、知識の一方的な伝達だけなら動画配信すれば済んでしまう、という時代であることも事実です。本稿でご紹介した中野民天氏の言葉を引用させていただけば、「わざわざ遠くから大勢の学生や教職員が立派なキャンパスに集まっているのに、お互いにほとんど話すこともなく帰っていくのはなんとももったいない。せっかく人が集まるのなら、もっと生身のコミュニケーションを取り、対話し学び合うことはできない」でしょうか。教員も学生も次の授業がワクワク楽しみになるような、そして学生が能動的・主体的に深く学べるような、そんな授業の工夫をこれからも模索して参りたいと思います。

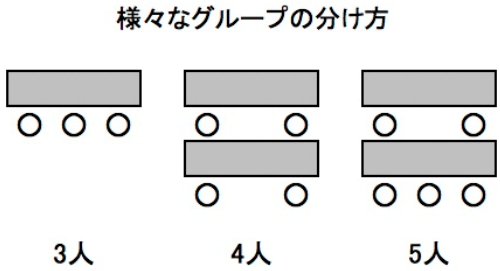
※くじを使った「指定席」の作り方（例）

【大教室での参加型授業の工夫８か条】の「1. 教室の席は扉でくじを引き、少人数のグループを作る。」で、くじで指定席を作る例（座席図）は以下の通りです。（中野民夫著『学び合う場のつくり方』のp.23より抜粋）

以下のような座席図を前のスクリーンに表示



グループの人数は４人を基本に、３人や５人を前後２列で作る



学修成果の可視化 ④

ポートフォリオを学生の主体的な学びに繋げるために

大学院教育強化推進センター／高大接続・全学教育推進センター　市村 光之

高大センターでは、AP事業・テーマⅡの取組として、学修成果の可視化、および学生が主体的に学びをデザインするツールとしてのeポートフォリオの再構築を進めてきました。2018年度よりYNU学生ポートフォリオに「学生プロファイル」機能を本格導入し、半期ごとに全学生が入力する仕組みを実現しました。これにより学生は、学修成果を学士力と就業力の両面で可視化できるようになりました。

ポートフォリオ活用促進のため学生向け情報発信を強化する

2019年の３月発行の本ニュースレター（Vol.11）では、新ポートフォリオ導入から1年目のまとめとして、学生たちが新ポートフォリオをどのように受け止めたのか、について検証しました。その結果、入力の意義がよくわからず、設問も多いこともあり、いい加減に入力した学生が少なからずいることが課題として見えてきました。加えて、ポートフォリオ、殊に自由記述の振り返りシートを教員が閲覧できる点も、学生側は賛否両論が分かれ、運用方針を再検討する必要があることもわかりました。

導入２年目の今年は、これらの課題を克服すべく、次の施策を実施しました。

- 新入生：ポートフォリオの活用法を説明した「アカデミックリテラシー編」（本学の初年次教育用副読本）配布する
- 入学時のオリエンテーションに加え、初年次教育科目で周知を図る
- 学生プロファイルの分析結果を「学生IRニュースレター」（年８回）で学生に紹介し、啓蒙を図る
- 学生プロファイルの入力項目を精査・削減して（70問→37問）学生の入力負担を軽減する
- より使い勝手のよいシステムに改修する

これらのうち「学生IRニュースレター」は、学生向けの情報発信として初の試みでした。学生IRの分析結果を学生にも周知し、主体的な学びを考えるきっかけにしてもらうのが目的です。4月には学修・生活時間の特徴と課題について4回、10月には就業力アセスメントの分析結果を元に本学学生の課題について4回発行しました。こうした活動を通じて、ポートフォリオの役立ち度は2018年秋：2.06（４件法の平均値）から、2019年度秋：2.36と少し向上しています。ポートフォリオの役立ち度を、ニュースレターの通読の有無により比較すると、読まない人：2.44に対し、読んだ人：2.70（2019年度秋、1年生）でした。啓蒙活動により入力の意義や活用法がわかれば、役立度も上がると期待できます。

ポートフォリオの目的は主体的な学びの醸成ですが、それをどのように測定するか、悩ましいところです。試みに自由記述の振り返りシートの記述量を見ると、1年生は本格導入前の2017年は平均63.1文字でしたが、2018年は85.4文字、2019年は111.1文字と着実に増加しています。これらは一連の周知策の効果も含め、学生の皆さんが入力の意義を見出し始めた兆しと推測しています。

2018年春の学修･生活時間をテーマにしたニュースレター発行時には、読者アンケートを試みました。自由記述の感想では：

- 自分の学習習慣や生活習慣を見直すきっかけになった
- 統計的に学生生活のデータを自分と比較することで、改善する要因になりうる

など、学生IRの分析結果が、学生の主体的学びのきっかけになることが確認できました。さらには：

- （分析結果が学生に紹介されるのは）履修登録時、学生プロファイルに入力する意味付けになる
- 学修・生活行動自己チェック結果が、大学で活用されていることがわかって良かった

とあるように、大学側が教育改善のために学生から収集したデータを活用していることを知らしめることも、副次的な効果があるようです。

大学側が学生たちをどう捉え、教育課題は何で、それらにどう立ち向かおうとしているのか。教職員のみならず学生にも共有し、共に考えることも、学生の主体的な学びの促進に繋がるのではないでしょうか。今後も学生向けの情報発信を積極的に進めていきます。

（学生 IR ニュースレター）

学生の自主的活用に期待し、教員による振り返りシート閲覧は廃止する

ポートフォリオを学生の主体的な学びのツールとするために、再検討すべきもう一つの課題が、ポートフォリオの教員への開示の是非についてです。結論としては、本学が目指すポートフォリオは学生の主体的な内省を促すツールであることに鑑み、2020年4月より、振り返りシートの閲覧は廃止することに決定しました。

YNU学生ポートフォリオの内容は主に以下の４項目に分かれ、必要に応じてコンタクト教員等の指導教員が担当学生のポートフォリオを閲覧できるようになっています。

① 学生基本情報：学生の緊急連絡先等
② 学修成果：履修状況と成績、学士力、就業力
③ 振り返りシート：自由記述欄
④ 教員チェック・コメント記入欄

この閲覧機能の功罪をめぐる主な論点を整理すると：

学生側の□メリット、■デメリット

□ 教員に見てもらえることが励みになる（受けとめかたは人それぞれ）
□ 教員からアドバイスがもらえる（特にゼミ、研究室に所属する前の低学年）
□ 悩みがあるときに相談のきっかけになる（特にゼミ、研究室に所属する前の低学年）
■ 閲覧してほしくない（記述内容はプライベート）
■ 閲覧前提では当たり障りのないことしか書かなくなる
■ 振り返りシートだけ読んで、適切なアドバイスが得られるとは思えない

教員側の□メリット、■デメリット

□ 学生の実情を知るきっかけになる
□ 悩み、問題のある学生を発見するきっかけになる
□ 学生から信頼を得るきっかけになる
■ 顔も知らないであろう学生に適切なフィードバックをするには限界がある
■ きちんと読み、対応するのは負担が増えそう
■ 対応した結果、トラブルが生じたときの対処が不安

検討の前提

- YNU学生ポートフォリオの目的は、《学生の主体的な学び》を促すことであり、学生の自己発見的な気づきや振り返りを妨げない、学生の信頼を裏切らない運用が求められる
- 学生のニーズも、教員側の考え方も様々な中で、可能な限り公平で全学統一の運用が求められる

この閲覧機能に関して、学生の考えも賛否両論に分かれることは、１年前の本ニュースレター（Vol.11）で説明したとおりです。そうした学生の意見を踏まえ、今年度は各部局から意見聴取しつつ検討を重ねました。教員側も、悩みや課題のある学生を早期に発見しサポートするきっかけになると、閲覧を肯定的に捉える考えと、記述から学生の気持ちや意図を読みとり適切にフィードバックする困難さから、実際の運用を心配する声があります。ポートフォリオを確認しなくても、コンタクト教員等の面談で学生をサポートできている面もあります。

これらの検討を経て、ポートフォリオの運用を担当する高大センターの学生IR統括部会で今後の運用方針を策定し、以下の方針案を教務厚生部会に提案し、2019年12月の同部会で承認を得ました。

ポートフォリオは主体的な内省を促すツールであり、学生の自己発見的な気づきや振り返りを妨げない運用が求められています。この本来の目的に則り、2020年度より以下の通り運用を変更します：

- 学生基本情報、学修成果：現状通り閲覧可
- 振り返りシート：閲覧不可
- 教員チェック・コメント記入欄：廃止
- 教員が振り返りシートを閲覧しない代わりに、何らかの相談のある学生がコンタクト先を探しやすいように、コンタクト教員の連絡先や各種相談窓口のリストを掲載する

近年、各大学でeポートフォリオシステムの導入が進んでおり、大半の大学は教員による閲覧を前提に運用しているようです。学生の性質やサポート体制など大学により事情はさまざまで、ポートフォリオを介したサポートが有効な場合もあるでしょう。

その大学界全体の流れとは別の道を歩むことになりますが、今回の決定を新ポートフォリオの企画・運用担当者として、筆者は誇りに思っております。本学が取り組む学修成果の可視化は評価や学生管理のためではなく、学生の主体的な学びを醸成するためであり、その根幹が「振り返りシート」です。学生の向上心を信じ、自主的活用に委ねたいと考えます。

最後になりましたが、一連の意見聴取等にご協力いただいた教職員の皆様に感謝申し上げます。

なお、本件の詳細な報告、および今年度の学生IRの報告書類は下記より公開しています。ぜひご一読ください。

サイボーズのファイル管理を開く
高大接続・全学教育推進センター＞学生ポートフォリオ＞2019年と順に開く

CENTER NEWS

開催報告 2019年度 横浜4大学 第5回ヨコハマFDフォーラム

2019年12月７日（土）、神奈川大学横浜キャンパスにて「地域連携による大学教育 – PBLとシチズンシップ教育 –」をテーマに、第５回ヨコハマFDフォーラムが開催されました。この「ヨコハマFDフォーラム」は、FD 活動の連携に関する包括協定を締結している横浜市内４大学（神奈川大学、関東学院大学、横浜市立大学、および本学）が、その連携の一環として年に１度開催しているものです。第５回目となる今回は、62名の教職員・学生の参加がありました。

今回のフォーラムでは、文部科学省中央教育審議会答申「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」（2018年11月26日）の中で「高等教育の将来像を国が示すだけではなく、それぞれの地域において、高等教育機関が産業界や地方公共団体を巻き込んで、それぞれの将来像となる地域の高等教育のグランドデザインが議論されるべき時代を迎えている」と指摘されていることを踏まえ、大学教育においても地域連携が重要な課題となっていることから、「ヨコハマ」を学びのフィールドとする横浜４大学が実践している取り組みについて、報告とパネルディスカッションが行われました。

フォーラムの様子

第１部の実践報告では、４つの大学からそれぞれ発表がありましたが、本学からは「副専攻プログラム 「地域交流科目」と「地域創造科目」の地域実践による大学教育」とのテーマで、地域実践教育研究センターの志村真紀准教授と経済学部４年生の山口大地さんが発表されました。山口さんは、地域課題実習の学生公募型プロジェクト「アグリッジプロジェクト」の代表を務めた学生さんで、農業による地域活性化を、「ビジネスによる経済活性化、地域コミュニティの活性化、技術開発（研究）による地域活性化」を３つの軸として活動を行なっている様子について、活き活きと語っておられました。続く第２部では、第１部の報告者に加えて、神奈川大学および関東学院大学の学生さん２名、そして、地域側の代表としてNPO法人のスタッフの方が登壇され、 地域を対象とした座学と実践（アクティブラーニング）の学びについて、財源や継続性の課題等の観点から、活発な情報（意見）交換が行われました。

― 高大センターからのお知らせ ―

AP成果報告書の発行について

2016年度に採択された「大学教育再生加速プログラム（AP）」事業が本年度3月で終了いたします。その成果報告書を、この度作成いたしました。今後、学内の専任教員の先生方に冊子として配布されますので、ぜひご覧になってください。高大センターのHPにも掲載予定です。

2020年度春学期授業アンケートの実施について

第1ターム：2020年6月18日（木）- 7月8日（水）
第2ターム／春セメスター：2020年 8月3日（月）- 9月4日（金）

学生IR、FD活動の報告書類の公開

学生の学修・生活行動の分析結果や卒業・就職先調査結果など、各種学生IRおよびFD関連の情報は、関連する会議体や教授会でのFDセミナーにおいて報告しておりますが、よりタイムリーに関係各部局に展開すべく、サイボーズ内に公開フォルダ設け、関係各部局にて適宜参照・入手できるようにいたしました。必要に応じて学生サポートや教育改善にご活用ください。

- **格納先：サイボーズ ＞ ファイル管理 ＞ 高大接続・全学教育推進センター**
- **提供文書の取り扱い:学内限定公開（本学教職員のみ）を含みます。学内限定公開文書のダウンロード後の取り扱いについてはご配慮ください。**

横浜国立大学 AP/FDニュースレター 第13号（通号39号）

大学教育再生加速プログラム

発行：令和２年（2020）年 3月　編集・制作：高大接続・全学教育推進センター

Email：yec.center@ynu.ac.jp

ホームページ：www.yap.ynu.ac.jp（AP特設ページ）www.yec.ynu.ac.jp（高大接続・全学教育推進センター）